

S^1 作用の固定点集合の有理
ホモトピー

岡山大 理 吉田朋好

X を S^1 作用をもつ単連結有限 CW 複体とし、 F を固定点集合の一つの連結成分とする。 F も単連結有限 CW 複体であると仮定する。 $x_0 \in F$ とし、 X と F の有理ホモトピー $\pi_*(X, x_0) \otimes \mathbb{Q}$ と $\pi_*(F, x_0) \otimes \mathbb{Q}$ の次元の関係を調べるのが本稿の目的である。 以下、 X は有理ホモトピー型有限 ($\sum_{k=1}^{\infty} \pi_k(X) \otimes \mathbb{Q}$ が有限次元 (\mathbb{Q} 上)) と仮定する。 このような空間は、球面、Lie 群の商空間等、通例、変換群のよく考えられる空間を大体含む。 G. E. Bredon は [2] において、上のような条件のもとに、 $\pi_*(F) \otimes \mathbb{Q}$ の次元と $\pi_*(X) \otimes \mathbb{Q}$ の次元との関係及び Whitehead 積の関係等を調べている。 Bredon の議論は $\pi_*(F) \otimes \mathbb{Q}$ の元から幾何学的に $\pi_*(X) \otimes \mathbb{Q}$ の元を構成することにより、両者の比較をするもので、かなり巧妙なテクニックを用いる。 一方 Allday は [] に

おいて Sullivan の有理ホモトピー理論を用いて, Bredon と同様の結果を導いている。また, Allday の方法は、代数的に大変複雑な構成を行っているわけには、結果は Bredon の結果からあまり進んでいないと思われる。ここでは、 ΩX と ΩF のコホモロジーを局所化定理により比較することによって幾分見通しよく Bredon の結果の改良を行うことが出来ることを報告する。

ΩX と ΩF を $x_0(\in F)$ に基底をもつ X, F のループ空間とする。 ΩX は自然に S^1 作用をもち、その固定点集合は ΩF となる。一般に S^1 -空間 Y に対し、 $Y_{S^1} = ES^1 \times_{S^1} Y$ 、 $H_{\mathbb{Q}}^*(Y) = H^*(ES^1 \times_{S^1} Y)$ とおく (ES^1 は自由 S^1 -作用をもつ contractible space)。

BS^1 を S^1 の分類空間 $t \in H^2(BS^1, \mathbb{Q})$ を生成元とする。 $H^*(BS^1, \mathbb{Q}) \cong \mathbb{Q}[t]$ (多項式環) であり、 $H_{\mathbb{Q}}^*(Y) \otimes \mathbb{Q}$ は $H^*(BS^1, \mathbb{Q})$ -加群である。次の局所化定理が成り立つ。

定理 1. 包含写像により誘導される準同型写像

$$H_{\mathbb{Q}}^*(\Omega X, \mathbb{Q})[t^{-1}] \xrightarrow{\sim} H_{\mathbb{Q}}^*(\Omega F, \mathbb{Q})[t]$$

は同型写像である。

一般に ΩX は無限に多くの次元において、自明でない \mathbb{Z} -元 \mathbb{Z} -群をもつので、上の局所化定理は通常の局所化定理から直ちに得られない。この局所化定理により $\pi_*(X) \otimes \mathbb{Q}$ と $\pi_*(F) \otimes \mathbb{Q}$ の次元の比較ができて、次の結果を得る。

定理 2. X, F を上のような空間とする。このとき $j = 0, 1, 2, \dots$ に対し、

$$\sum_{k \geq 0} \dim_{\mathbb{Q}} \pi_{j+2k}(F) \otimes \mathbb{Q} \leq \sum_{k \geq 0} \dim_{\mathbb{Q}} \pi_{j+2k}(X) \otimes \mathbb{Q}$$

が成り立つ。

Bredon [2] では上の不等式の左辺から $\sum_{k \geq 1}$ を除いた形の不等式、Allday [1] では、上の不等式の $j = 0, 1$ の場合が証明されている。

定理 1 の証明。

PX を $x_0 \in F$ に基点をもつ X の path space とする。 PX は自然に S^1 -空間となり、 $\Omega X \rightarrow PX \rightarrow X$ は S^1 equivariant な fibration となる。次の図式を考える。

$$(A) \quad \begin{array}{ccc} EG \times_G (\Omega X) & \longrightarrow & EG \times_G (PX) \\ \downarrow & & \downarrow \\ BS' = BG & \longrightarrow & EG \times_G X \end{array}$$

ここで $BG = EG \times_G \{x_0\}$ とみなす。この図式に Eilenberg-Moore の Spectral seq. を適用する。

$$\text{Tor}_{H_G^+(X)} (H^+(BG), H^+(BG)) \implies H_G^+(\Omega X)$$

(PX は equivariant に可縮だから $H_G^+(PX) = H^+(BG)$)

同様に次の fibre square を考える。

$$(B) \quad \begin{array}{ccc} EG \times_G (\Omega F) & \longrightarrow & EG \times_G (PF) \\ \downarrow & & \downarrow \\ BG & \longrightarrow & EG \times_G F \end{array}$$

このとき Spectral seq.

$$\text{Tor}_{H_G^+(F)} (H^+(BG), H^+(BG)) \implies H_G^+(\Omega F)$$

を得る。(B) の fibre square から (A) の fibre square への包含写像は Spectral seq. の間の

写像

$$\begin{array}{ccc} \text{Tor}_{H_G^*(X)}(H^*(BG), H^*(BG)) & \implies & H_G^*(\Omega X) \\ \downarrow & & \downarrow \\ \text{Tor}_{H_G^*(F)}(H^*(BG), H^*(BG)) & \implies & H_G^*(\Omega F) \end{array}$$

を induce する。この s を ideal $(t) \subset H^*(BG)$ で
局所化する。 $R_0 = H^*(BG)[t^{-1}]$ とおけば

$$\begin{array}{ccc} \text{Tor}_{H_G^*(X)[t^{-1}]}(R_0, R_0) & \implies & H_G^*(\Omega X)[t^{-1}] \\ \downarrow & & \downarrow \\ \text{Tor}_{H_G^*(F)[t^{-1}]}(R_0, R_0) & \implies & H_G^*(\Omega F)[t^{-1}] \end{array}$$

となる。 $\mathbb{F} \subset X$ を X の固定点集合の全体とし、
 $\mathbb{F} = F \cup F_1' \cup \dots \cup F_k'$ と連結成分に分解
する。このとき通常の局所化定理から

$$H_G^*(X)[t^{-1}] \cong H^*(F) \otimes R_0 \oplus H^*(F_1') \otimes R_0 \oplus \dots \oplus H^*(F_k') \otimes R_0$$

となる。 $H^*(F_1') \otimes R_0 \oplus \dots \oplus H^*(F_k') \otimes R_0$ の部分は、
 $H_G^*(x_0) \otimes R_0$ ($x_0 \in F$) に trivial に働くから

$$\text{Tor}_{H_G^*(X)[t^{-1}]}(R_0, R_0) \cong \text{Tor}_{H_G^*(F)[t^{-1}]}(R_0, R_0)$$

となる。これから上の2つの Spectral seq. の E_2 での同型が得られ、定理1が証明された。

定理2 の証明

$\mathcal{M}(\Omega X)$ を ΩX の minimal model とする。 ΩX は H -空間であるから

$$\mathcal{M}(\Omega X) \equiv \{S(x_1, x_2, \dots, x_k), d=0\}$$

とあらわされる。ここに $S(x_1, \dots, x_k)$ は \deg が偶数の $\{x_i\}$ から生成される多項式環と、 \deg が奇数の $\{x_i\}$ から生成される外積多元環のテンソル積をあらわす。 $\deg x_1 \leq \deg x_2 \leq \dots \leq \deg x_k$ と仮定しておく。各 x_i は $\deg x_i - 1$ 次元の X の有理ホモトピーの基底の元を与え、 $\sum \dim_{\mathbb{Q}} \pi_*(X) \otimes \mathbb{Q} < \infty$ の仮定から、上の $\{x_i\}$ は有限個である。又

$\mathcal{M}(\Omega X_G)$ を $\Omega X_G = EG \times_G \Omega X$ の minimal model とすると、それは

$$\mathcal{M}(\Omega X_G) \equiv \left\{ \begin{array}{l} S(x_1, \dots, x_k) \otimes \mathbb{Q}[t], \\ dx_i = f_i(x_1, \dots, x_{i-1}, t) \\ dt = 0 \end{array} \right.$$

の形で与えられる。ここに $\deg t = 2$, f_i は $(\deg x_i + 1)$ 次

の多項式で $f_i(x_1, \dots, x_{i-1}, 0) = 0$ となるものである。

fibration $\Omega X \rightarrow (\Omega X)_G \rightarrow BG$ には, minimal model の準同型写像

$$\mathcal{S}(x_1, \dots, x_k) \xleftarrow{\text{projection}} \mathcal{S}(x_1, \dots, x_k) \otimes \mathbb{Q}\langle t \rangle \xleftarrow{\text{inclusion}} \mathbb{Q}\langle t \rangle$$

が対応する。

同様に ΩF の minimal model は

$$\mathcal{M}(\Omega F) = \mathcal{S}(y_1, y_2, \dots), \quad d=0 \\ \deg y_1 \leq \deg y_2 \leq \dots$$

と与えられ,

$$\mathcal{M}((\Omega F)_G) = \mathcal{S}(y_1, y_2, \dots) \otimes \mathbb{Q}\langle t \rangle, \quad d=0$$

となり, fibration $\Omega F \rightarrow (\Omega F)_G \rightarrow BG$ には minimal model の準同型写像

$$\mathcal{S}(y_1, y_2, \dots) \xleftarrow{\text{projection}} \mathcal{S}(y_1, y_2, \dots) \otimes \mathbb{Q}\langle t \rangle \xleftarrow{\text{inclusion}} \mathbb{Q}\langle t \rangle$$

が対応する。

$\overline{S(x_1, \dots, x_n)} = \{ a \in S(x_1, \dots, x_n) \mid \deg a > 0 \}$ と
 し、 $\overline{\mathcal{M}_X} = \overline{S(x_1, \dots, x_n)} \otimes \mathbb{Q}[t]$ とする。又、 $\overline{S(y_1, \dots)}$
 $= \{ b \in S(y_1, \dots) \mid \deg b > 0 \}$ とし、 $\overline{\mathcal{M}_F} =$
 $\overline{S(y_1, \dots)} \otimes \mathbb{Q}[t]$ とおく。 $\overline{\mathcal{M}_X} \subset \mathcal{M}((\Omega_X)_\mathfrak{q})$,
 $\overline{\mathcal{M}_F} \subset \mathcal{M}((\Omega_F)_\mathfrak{q})$ であることを $\mathbb{Q}[t]$ -submodule
 であり、包含写像から induce される準同型写像
 $\overline{\mathcal{M}_X} \rightarrow \overline{\mathcal{M}_F}$ がある。 (Ω_X は固定素を \mathfrak{q} と
 する $a \in \overline{\mathcal{M}_X}$ に対し $da \in \overline{\mathcal{M}_X}$ となる)。 ここで

$$Q_X = \overline{\mathcal{M}_X} / \overline{\mathcal{M}_X} \cdot \overline{\mathcal{M}_X}$$

$$Q_F = \overline{\mathcal{M}_F} / \overline{\mathcal{M}_F} \cdot \overline{\mathcal{M}_F}$$

とおけば、 Q_X, Q_F はともに $\mathbb{Q}[t]$ -module で
 包含写像から induce される準同型写像 $\tilde{\iota}^* :$
 $Q_X \rightarrow Q_F$ がある。又、 (x_1, \dots, x_n) に対応する
 元 $(\bar{x}_1, \dots, \bar{x}_n)$ が Q_X の $\mathbb{Q}[t]$ 上の生成元とな
 り、 (y_1, \dots) に対応する元 $(\bar{y}_1, \bar{y}_2, \dots)$ が Q_F
 の $\mathbb{Q}[t]$ 上の生成元となる。

補題 $\tilde{\iota}^*$ の (t) による局所化

$$\tilde{\iota}_{t^{-1}}^* : Q_X[t^{-1}] \rightarrow Q_F[t^{-1}]$$

は上への写像となる。

♯

この補題は minimal model の定義と、定理1から得られる。

この補題により $\mathcal{L} = (\bar{y}_1, \bar{y}_2, \dots)$ の位数 $\leq k$ は直ちにわかる。

$$z_1(\bar{x}_1) = \lambda_1^1 \bar{y}_1 + \dots + \lambda_e^1 \bar{y}_e$$

⋮

$$z_1(\bar{x}_k) = \lambda_1^k \bar{y}_1 + \dots + \lambda_e^k \bar{y}_e$$

$$\lambda_j^i \in \mathbb{Q}[\tau]$$

とす。この行列 $A_1 = (\lambda_j^i)$ の階数 = \mathcal{L} とする。

A_1 の i 次小行列 A_1^i で $\det A_1^i \neq 0$ とするものをとり、

$$A_1^i = \begin{bmatrix} \lambda_1^{i_1} & \dots & \lambda_e^{i_1} \\ \vdots & & \vdots \\ \lambda_1^{i_e} & \dots & \lambda_e^{i_e} \end{bmatrix} \quad \text{とする。}$$

$\lambda_j^{i_r}$ ($i_1 \leq r_1 \leq i_e$) で $\lambda_j^{i_r} \neq 0$, $(\widetilde{A_1^i})_{i_r}^{r_1}$ (A_1^i の $\lambda_j^{i_r}$ の余因子) の行列式 $\neq 0$ とするものをとり、

$$\bar{y}_1 \mapsto \bar{x}_{r_1}$$

と対応づける。

$$(\widetilde{A_1^i})_{i_r}^{r_1} = \begin{bmatrix} \lambda_2^{i_1} & \dots & \lambda_e^{i_1} \\ \vdots & & \vdots \\ \lambda_2^{i_{e-1}} & \dots & \lambda_e^{i_{e-1}} \end{bmatrix}$$

とおい、同様のことを行い $\bar{y}_2 \mapsto \bar{x}_{r_2}$ と対応

させる。これをくり返して、一対一対応 $(\bar{Y}_1, \dots, \bar{Y}_k) \mapsto (\bar{X}_{r_1}, \dots, \bar{X}_{r_k})$ をつくる。このとき $i^* \bar{X}_{r_j}$ は $t^{s_j} \bar{Y}_j$ $(s_j \geq 2)$ という項を含むから $\deg \bar{X}_{r_j} - \deg \bar{Y}_j =$ 偶数 (≥ 0) となる。この対応から定理2の不等式が得られる。

References

- [1] C. Allday, On the rational homotopy of fixed point sets of torus actions, *Topology* 17.
- [2] G.F. Bredon, Homotopical properties of fixed point sets of circle group actions, I. *Am. J. Math.* 91